

ワークショップでの対話が、 自校の潜在的な課題に目を向けるきっかけに

誰もが答えが1つではない問いに向き合うことが求められつつある現在、
教師にとっても、互いの考えや思いを共有する重要性が高まっている。そこで、VIEW21 編集部では、
自校の教師同士の対話を通じて、教育の「これから」を考えるオンライン・ワークショップ（以下、WS）を、
2020年9月から3回にわたって実施した。同WSは、参加校にどのような成果や効果をもたらしたのか。
第2回、第3回に参加した静岡県立静岡東高校の教師に話を聞いた。

WS参加の 成果・効果

1. 校内で思いや考えを共有するきっかけになった
2. 他校の実践から自校の課題に気づいた
3. 全校にも対話の機会を広げる機運が生まれた

オンライン・ワークショップ 概要

『VIEW21』高校版は、2020年8月号を起点に10月号から3号にわたり、コロナ禍における教師や生徒の気づきや学びを踏まえて新学習指導要領を捉え直し、教育の「これから」を考えるシリーズ特集を展開。各号の特集の末尾には、WSと連動するワークシートを折り込んだ。各回のテーマ・講師・プログラムは以下の通り。

第1回

テーマ 自校の教師同士の対話を通じて、自校の教育の「これから」を考える
(2020年9月実施)

講師 長野県蘇南高校 校長 小川幸司
ワークショップの様子は、[ここをクリックして参照](#)

第2回

テーマ 自校の教師同士の対話を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を考える
(2020年11月実施)

講師 國學院大学 教授 田村 学
ワークショップの様子は、[ここをクリックして参照](#)

第3回

テーマ 自校の教師同士の対話を通じて、「次につながる学習評価」を考える
(2021年2月実施)

講師 愛知県立豊野高校 進路指導主事 谷口明正

※いずれの回も、参加費は無料。

各回の主なプログラム

① 各号の特集の解説



② 自校の教師同士での対話



③ 質疑応答、対話の内容の共有

校内で思いや考えを 共有するきっかけになった

生徒の約半数が国公立大学に進学する静岡県立静岡東高校は、数年前からアクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業改善を全教科・科目で推進している。進学校で行うALを模索し、ALをテーマにした校内研修を実施。先進校訪問や外部の研修会に各教師が参加し、その内容を職員会議で報告する活動も行ってきた。

WS 参加者

研修課課長 村松正治

むらまつ・しょうじ◎教職歴 36 年。同校に赴任して 13 年目。地理歴史・公民科 (日本史)。

進路指導課課長 小関雅和

おせき・まさかず◎教職歴 30 年。同校に赴任して 12 年目。数学科。

研修課 神谷隼基

かみや・としき◎教職歴 5 年。同校に赴任して 1 年目。数学科。

進路指導課 樋田範文

といだ・のりふみ◎新採。同校に赴任して 1 年目。地理歴史・公民科 (世界史)。

学校概要

◎静岡県教育委員会「進学重点コアスクール」指定校。「学業と人間形成の両面において、生徒一人ひとりを大切に育てる」を教育方針に掲げる。

設立 1963 (昭和 38) 年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1 学年約 280 人

2020 年度入試合格実績 (現役のみ)

国公立大は、北海道大、東北大、金沢大、静岡大、名古屋大、京都大、九州大などに 154 人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ 91 人が合格。

URL <https://www.shizuoka-east.jp>

2020 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業中の 4・5 月に、「Classi」(*) や「G Suite for Education」などの ICT 活用をテーマにした校内研修を 6 回実施。その結果、多くの教師が、教科指導や生徒との対話などに ICT を使うようになった。一方で、外部の研修への参加や他校視察ができず、A L 先進校の実践に関する情報の収集が手薄となっていた。そうした中、研修課の神谷隼基先生が目を留めたのが、WS の第 2 回だった。

「コロナ禍でも落ち着いて授業ができるようになり、新学習指導要領に向けた課題にじっくり向き合う校内研修の実施を考えていた時に、この WS を知りました。本校が推進中の A L がテーマだったので、先生方は高い関心を示すのではないかと思います」(神谷先生)

神谷先生から WS 参加の提案を受けた研修課課長の村松正治先生も、自校の課題意識に合っていたことが参加の動機になったと語る。

「講師の國學院大学の田村学教授から、『主体的・対話的で深い学び』についての話を直接聞けることに大きな魅力を感じました。また、コロナ禍は学校教育にも大きな影響を与えましたが、先生方は教育活動について今、何を思い、考えているのか、校内で共有する場を持っていませんでした。WS をその機会にしたいと考えました」

第 2 回 WS には、同校では若手教師からベテラン教師まで 7 人が参加。WS の課題として出された「私が育成を目指す資質・能力」と「その資質・能力を育む、私が考える『主体的・対話的で深い学び』」について語り合った。教科・科目や世代を超えた対話は、多様な気づきをもたらした。特に、田村教授からの「深い学びとは、知識が関連づけられて、駆動する状態」という解説を受けて、各教科・科目の深い学びとして、疑問を検証していく理系の学びや、歴史の出来事の原因を考える学びなどの状態を挙げ合った。

「曖昧だった『深い学び』を言語化でき、他教科の学びへの理解も深まりました」(神谷先生)

進路指導課課長の小関雅和先生は、保健体育科の教師との対話から、各教科・科目や教師個々が積み重ねてきた経験を全校で共有する重要性を改めて感じたと言います。



写真1 第2回WSの様子。田村教授に、同校は「大学入試に向かう学びであっても、大学の先の将来の仕事を見据えた動機づけがある場合、主体的な学びと言えるか」と質問。田村教授は、「それはキャリア形成の学びとなり、大変よい学びだ」と回答した。



写真2 第3回WSの様子。学習評価時の生徒への声かけを行うロールプレイは、いずれの参加者も、定期考査や模擬試験の結果返却の場面を想定して行った。その結果、面談週間を模擬試験の返却に合わせた時期に行えないかといった議論に発展した。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

「保健体育科では、生徒個々の運動能力が異なることから、生徒ができるようになったことを評価に反映する方法を模索してきたといった話がありました。観点別学習状況の評価への意識が他教科・科目に比べて高いことを初めて知り、教科内で練ってきた評価方法を校内で共有したいと考えました。WSは、教科・科目間の横のつながりを持つ機会にもなりました」

他校の実践から 自校の課題に気づいた

第2回WSで手応えを得たことから、「次につながる学習評価」をテーマとした第3回WSにも参加。学習評価は、同校が全校で検討しようと考えていた課題だった。

「ALの視点を取り入れた授業改善を学校全体で推進する中で、次は学習評価について検討しようと考えていました。それは、校内ではまだ話題に上っていませんでしたが、WSへの参加が、学習評価を自校の課題として提起するきっかけになりました」(村松先生)

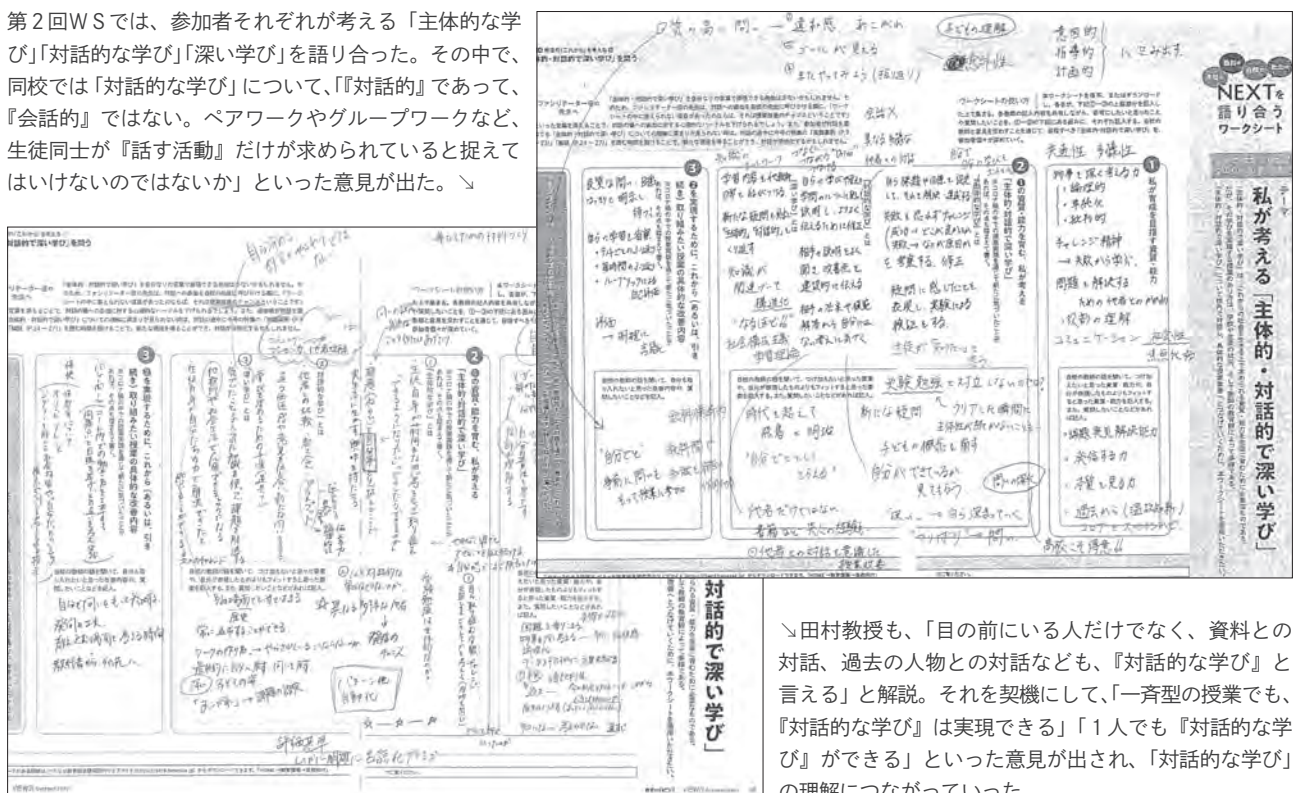
第3回WSでは、「手厚くフォローすべき生徒に評価を伝える」という設定で、参加者が教師役と生徒役に分かれてロールプレイを行った。教職1年目の^{といたのりふみ}樋田範文先生は、生徒への接し方を直接学ぶ機会になったと語る。

「生徒役として先生方の接し方を直に経験したことで、生徒の取り組む姿勢や変容をしっかりと捉えて、それに応じた評価をすべきであることが、身をもって分かりました」

また、講師を務めた愛知県立豊野高校の谷口明正先生から、模擬

第2回WSで同校の教師が書いたワークシート

第2回WSでは、参加者それぞれが考える「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を語り合った。その中で、同校では「対話的な学び」について、『対話的』であって、『会話的』ではない。ペアワークやグループワークなど、生徒同士が『話す活動』だけが求められていると捉えてはいけないのではないか」といった意見が出た。↓



「田村教授も、「目の前にいる人だけでなく、資料との対話、過去の人物との対話なども、『対話的な学び』と言える」と解説。それを契機にして、「一斉型の授業でも、『対話的な学び』は実現できる」「1人でも『対話的な学び』ができる」といった意見が出され、「対話的な学び」の理解につながっていった。

試験の振り返りを丁寧に行う取り組みを聞き、同校でも模擬試験を次の学習につなげる大切さに改めて目が向けられた。

「本校では、1・2年生では事前指導に力を入れ、3年生になると進研模試などの模擬試験の結果を分析させています。しかし、志望校の合格可能性判定にとらわれがちな生徒に、結果の振り返りこそが重要だと気づかせるために、1・2年生においても事後指導を強化していこうと、意見が一致しました」(小関先生)

第3回WS後の土曜日に、1・2年生対象の模擬試験が控えていた。自己採点を行う予定だったため、事後指導として、内容を振り返って、自身の強みと弱みをつかみ、それを次の学習に生かすよう生徒に声をかけることを、担任に申し送ることにした。

全校にも対話の機会を広げる機運が生まれた

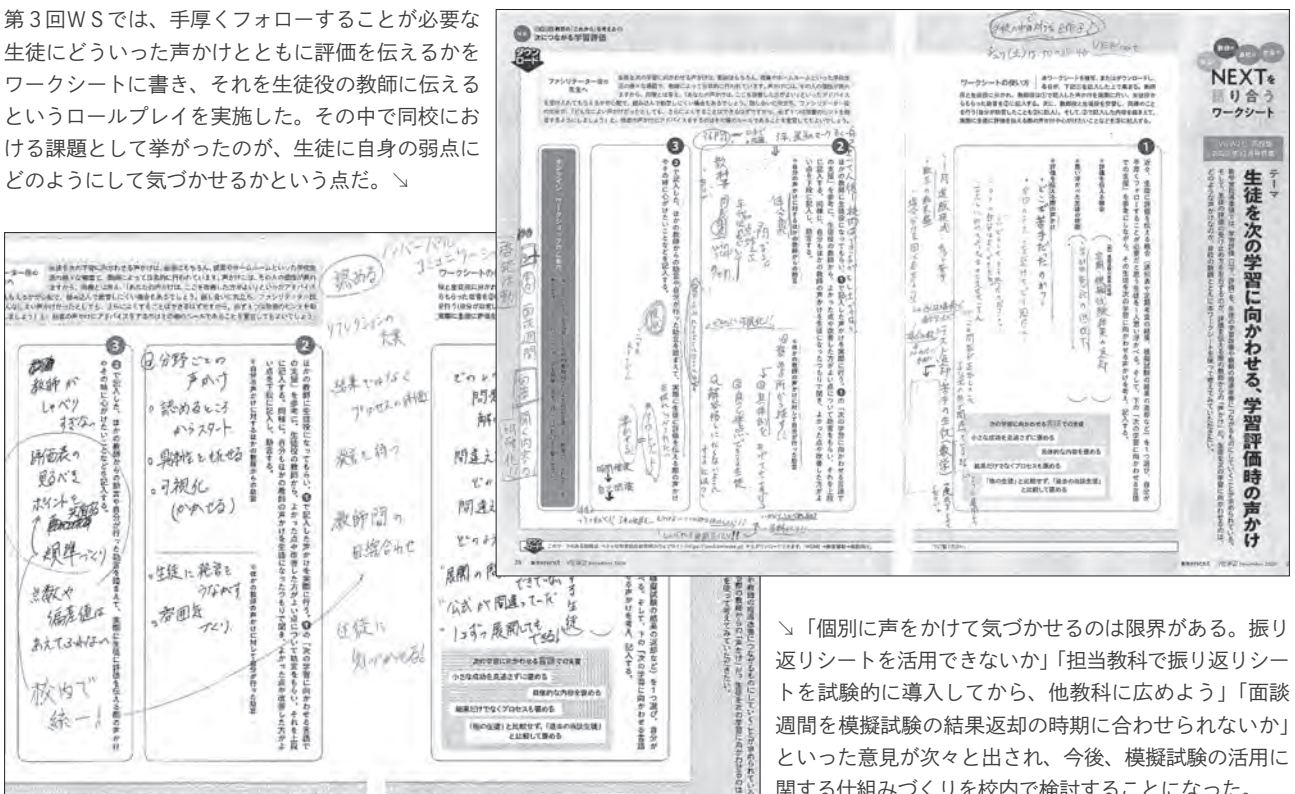
「WSでの対話を通じて自校の課題に本校の教師の目が向けられたことで、その課題について校内で検討しようという機運が生まれたと感じています」と小関先生。数人で始めた対話を全校での対話につなげ、教育活動の見直しにじっくり取り組んでいきたいと話す。

校内にICT活用が浸透したことから、気軽に参加できるオンライン研修を活用しつつ、校内での対話を広めたいと、村松先生は語る。

「WSを通じて、識者の解説や他校の事例は、直接聞いた方が先生方の気づきや学びが深まると感じました。まずはWSや研修に関心のある教師が参加し、その内容を周りに伝えることで、教師の学びや対話の輪を広めていきたいと思います」

第3回WSで同校の教師が書いたワークシート

第3回WSでは、手厚くフォローすることが必要な生徒にどういった声かけとともに評価を伝えるかをワークシートに書き、それを生徒役の教師に伝えるというロールプレイを実施した。その中で同校における課題として挙げたのが、生徒に自身の弱点にどのようにして気づかせるかという点だ。↓



「個別に声をかけて気づかせるのは限界がある。振り返りシートを活用できないか」「担当教科で振り返りシートを試験的に導入してから、他教科に広めよう」「面談週間を模擬試験の結果返却の時期に合わせられないか」といった意見が次々と出され、今後、模擬試験の活用に関する仕組みづくりを校内で検討することになった。